

【エッセイ】 離縁

前川 美和

娘が二歳になる孫を連れて、夫の元から新しいアパートに移り、別居を始めて半年が過ぎた。

夫の言い分、妻の言い分、いろいろあるだろうが、結局「合わなかった」のだろうと思う。のしり合いの喧嘩の挙句、互いの実家に逃げ帰ることを繰り返して、娘は今、夫と離れて肉体的にはきついが精神的には穏やかな日々を送っている。親権も絡んでいるためか、夫はなかなか離婚を承知してくれず、やむを得ず調停を申し立てた。

別居後、夫は孫の保育園料の半額を出してくれているものの、その他の経済的援助は拒んでいるにもかかわらず、父親の権利を主張し隔週の週末、金土日と二泊三日で孫を実家に連れていく。母子でしっかり生きていこうとフルタイムで働く娘にとって、週末は子どもとゆっくりかかわれる大切な時間だが、夫は自分は親だから半分は子どもといっしょに過ごす権利はあるが、そこは譲って平日いっしょにいさせてやっているのだから二泊三日は少なくらいだ、この条件を飲まなかったら自分は仕事をやめて孫を保育園から連れ出しだれも知らないところへ行って二人で暮らす、とうそぶく。

父親とべったり過ごした孫は日曜日の夜、母の元に戻されるが「お父ちゃん好き、お母ちゃん嫌い」と泣きわめく。その子をなぐさめ、あやしながら隔週毎繰り返される光景に娘の気持ちは落ち込み気味になるが、次の日はまた早朝から子供を叩き起こし、保育園に連れて行かなければならない。

自分を励まし、心を強く耐えるしかない。

幼い孫は、この二重生活を小さな心、小さな頭でどうとらえているのだろう。小さなキヤパで処理できるレベルのことなのだろうか。向こうでの出来事や父親に関してはしゃべってはいけないことのように感じているのか、ほとんど話そうとはしない。

最近、孫は接統助詞や終助詞なども使って長い文も話せるようになってきた。そして、「好き」と「嫌い」を頻繁に使う。自分の発する「好き」「嫌い」という言葉の持つ効果を認識しているようだ。幼いその口から出る「好き」という言葉の与える幸福感、「嫌い」という言葉の残酷さ、拒否感を楽しんでいる感さえある。大人は心してかからなくてはならない。とはいっても・・・。

きょうもお昼寝のとき、「お父ちゃん好き、お母ちゃん好き、おばあちゃん大好き」と言っていた。彼女は平和主義者である。

〈了〉